

フィジーで考える新しい観光 —環境保全とコミュニティーとの協調

国際地域学部国際観光学科3年

田口 晃子



きれいなサンゴや貝殻が落ちていたり、ヤドカリとも遭遇できる浜辺

前回(3日付)に続いて「南太平洋の十字路」フィジーからの報告です。フィジーは日本から南へ約7000キロ、ナンディ国際空港へ直行便が出ています(所要時間8時間30分)。総面積は1万8千平方キロ、300以上の島々によって構成される島嶼国です。

「サステイナブル・ツーリズム(持続可能な観光開発)」について、1年間学んできました。この考え方は大規模・大量消費型の旅行形態では、観光地の文化や習慣、環境を破壊してしまふという反省から生まれました。



南半球のマナ島で、暑いクリスマスを送りました(一番手前が筆者の田口さん)

せない関係にあります。リゾートが支払う借地代が、地元にとって大きな収入源となっているばかりでなく、リゾート内でも、周囲の村に無料で供給されています。リゾートの存在が、地元コミュニティーに大きなメリットをもたらしていることが分かります。

今回はマナ島へ行き、美しい自然は観光客の大きな誘致要因になるのだと実感しました。アトラクションや高度な設備がなくても、多くの観光客がマナ島を訪れています。スタッフのあの笑顔、そしてあの美しい海と自然が人々をひきつけるのです。

条例で環境守るマナ島

海水を真水化、汚水は浄化

このホテルの前任の総支配人が、松園先生のかつての教え子だった縁で、私たちの研修は可能となりました。

まず、リゾートの現総支配人である田中正男さんに環境への配慮についてうかがいました。マナ島では条例により、ヤシの木よりも

高い建物がありません。リゾート内でも、むやみに新しい施設を造るのではなく、小さなコテージの増設で宿泊客の増加に対応しています。島の美しい景観を保ち、ゲストに自然の中で安らげるための配慮です。

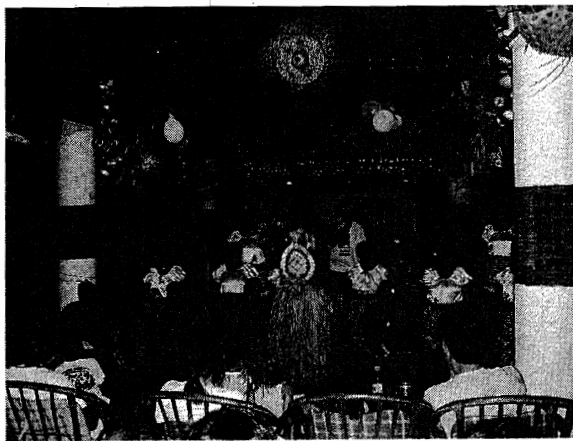
さらにこのリゾートでは、海水を真水化して水道水をつくっています。そしてシャワーやトイレなどで使用された汚水を海へ流すことなく、段階を踏んで再度浄化しています。繰り返しトイレや植物の散水に使用するという「水のリサイクル・システム」が、島内

で完結しているのです。また、瓶や缶は機械で圧縮し、本島でリサイクル処理されています。リゾート内で使用されたタオルもクリーニングのため本島へ持って行きます。これによって、マナ島で出る汚水の量を大幅に減少させ、環境にも良い効果をもたらしています。

このリゾートの第2の特色として、地元コミュニティーとの良好な関係を築けることができます。リゾートと集落が地理的に近接しているだけでなく、雇用と環境の面からも、住民生活とリゾートはもはや切り離

東洋大板倉キャンパス
田園の学舎
発

~第3部 XI



現地の踊りや歌が味わえる迫力満点の「メケショー」